

Title	意味の問題[I]
Sub Title	The problem of meaning [I]
Author	山根, 和平(Yamane, Kazuhira)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1967
Jtitle	哲學 No.50 (1967. 3) ,p.129- 149
JaLC DOI	
Abstract	Since the logical empiricists claimed metaphysical statements as meaningless, the problem of meaning becomes one of the most controversial problems in current philosophy. In this paper I endeavoured to show the following two points : (1) A linguistic theory which is called transformational grammar contributes to provide for the theoretical device by which is clearly explained the meaning of a sentence. According to the transformational grammarians, a pseudo-sentence is claimed as semantically anomalous, instead of as meaningless. (2) However, their arguments do not have any philosophical implications beyond the establishment of a method of formulating the meaning of a sentence, because the grammatical structure clarified by the transformational grammar is different from the logical structure of a sentence about which the logical empiricists established their philosophical claims.
Notes	第五十集記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000050-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

意 味 の 問 題 [I]

山 根 和 平

1

ある陳述 statement について、意味がある meaningful か、意味がない meaningless かを決定するための規準は何か。⁽¹⁾この種の問題が、現代哲学の問題となったのは、論理実証主義者たちが、すべての陳述を、真か偽か無意味かに分け、伝統的な形而上学（と論理実証主義者たちが称するところのあらゆる種類の哲学）の主張を、すべて無意味だときめつけて以来のことである。⁽²⁾かくして例えばハイデガーの「無が無化する」の如き「形而上学的」陳述は、無意味な陳述として「科学的」な思想の外に排除されてしまった。それどころか「無が無化する」の如き陳述は、ある一個人の感情の表現として、詩ではありえても学問的な陳述ではないとさえされた。なぜこのように無意味な陳述が可能となるか。論理実証主義によれば、それは全く、自然に発生した言語 natural language が不合理であり厳密性を欠いているからである。従って、はじめから合理的で厳密な体系として、人工言語 artificial language を作っておけば、無意味な陳述は自動的に排除できると考えられた。そしてこの人工言語を手段として展開する思想体系は、古来の哲学の諸問題を一抛に解決する万能薬であるかのように思われた時期もあったのである。⁽³⁾

しかし人工言語は、決して論理実証主義が主張するような合理的なものではなかった。むしろあまりにも形式的側面を重視しすぎた結果、どんな思想体系に対してもその裏付けを与えることになった。例えば唯物論と唯

心論との論争に際しては、唯物論を支持するのに都合のいい人工言語を構成することができると同時に、唯心論にとって都合のいい人工言語を作ることもできるので、従ってこの論争そのものに対しては、何らなすところなくして終ってしまうという結果になった。⁽⁴⁾ 論理実証主義の旗頭であったカルナップは、統語論 syntax の段階で無意味な陳述をしめ出すことに失敗してから、意味論 semantics の段階に活路を見出そうとしたが、それもうまく行かずに、結局最後には語用論 pragmatics の段階にまで後退して、ある陳述に意味があるかないかは、結局その陳述を使う人の置かれている立場によって決定されるのであることを認めざるを得なくなってしまう⁽⁵⁾ った。

ビトゲンスタインの影響を受けたオクスフォード学派の日常言語の哲学 ordinary language philosophy は、自然に発生した言語に対して、論理実証主義ほど辛くは当たらなかった。オクスフォード学派の考えでは、普通のことばでも、使い方さえ正しければ、十分に学問的思考に耐える陳述を作り出せるはずである。また「無が無化する」のような陳述も、ある意図、例えば人を扇動するとか、その他色々の態度をとらせることを目的とした場合には、「意味がある」ことを認める。ただしこの陳述が数学や自然科学の陳述と同様、何ごとかを記述するために使われるとすれば、これはやはり日常のことばの濫用であり、「無が無化する」は根拠のない baseless 陳述であるということになる。かくしてオクスフォード学派の努力は、哲学で用いられる個々の言葉——例えばアームソンが行なったような、ある種の形容詞——の（「英語」という特定の言語の中での）使い方の分析に集中することになった。⁽⁷⁾

かくしてある陳述に意味があるかないかの問題は、その陳述の中で言葉が正しく用いられているかどうかの問題に置きかえられた。例えば、“... is good.” という陳述の分析は、まず “good” ということばが英語でどのように使われるかの分析から始めなければならない事になった。だが

この研究の方向が、あくまでも個々の言葉の分析に止まったために、結果としては、各人各様の仮説を提出したに止まり、一つの実りある理論体系を作ることができなかった。日常言語の哲学には、論理実証主義に欠けていた現実との接触即ち経験的データへの志向があったけれども、逆に論理実証主義の長所である体系性への志向が欠けていたことになる。⁽⁸⁾

かくして陳述の有意味性と無意味性を明確に区分する規準の問題に対しては、論理実証主義も日常言語の哲学も、十分な解答を与えることができなかった。もちろん以上の二つの思想だけが、この問題に答えようとしたわけではない。日常言語の哲学をも含めた広義の「分析哲学」あるいは「科学哲学」と呼ばれるグループから、さまざまな提案がなされたことは事実である。ある人々は行動心理学の主張を取り入れて、刺戟と反応のメカニズムによって意味の問題を解決しようとし、⁽⁹⁾他の人々は、サイバネティクスやコミュニケーションの理論を援用して、この問題に説明を与えようと努めた。⁽¹⁰⁾

2

しかし、ある陳述が有意味か無意味かという問題は、もともと言語学の問題であったはずである。しかし従来の言語学が（いわゆる「構造言語学」を含めて）意味の問題にあまり注意を払わなかったということも事実である。意味論は従来の言語学では、言語学の他の分野では解決がつかない種種雑多な問題を投げこむための屑かごのようなものであった。⁽¹¹⁾この事実は、「意味論」が、単なる経験的データの集積に止まり、言語学の理論の中で一つの理論体系を構成するまでに至らなかった事を意味する。このことは言語学が意味論を一つの理論として育て上げる努力をしなかったというよりは、むしろ意味論を育て上げるための強力な方法論的武器を欠いていたためではないかと思われる。

果して言語学がひとたび強力な方法論的武器を発見すると、意味論を理

論的に構成したばかりでなく、陳述の有意味性の規準についても、全く新しい提案を行なうようになった。⁽¹²⁾ その武器とは一般に変形文法 transformational grammar の名で呼ばれるものである。⁽¹³⁾ 結論を先に言ってしまうと、変形文法の主張によれば、「無が無化する」のような陳述は、意味論的に変則 semantically anomalous であり、“good” のような言葉の意味は、syncategorematic⁽¹⁴⁾ であるという。しかしこうした主張について論及するためには、変形文法の体系について説明し、これらの用語の意味を明確にしておかなければならない。かくする事によって、変形文法の方法が、言語分析を方法とする哲学にとって、一つの新しい強力な手段であることが明らかになると同時にその限界もまた明らかになるからである。

3

変形文法の考え方が現われるまでには、言語学の中でさまざまな問題提起がなされて居り、これらの問題を解決するために、変形文法はまさに現われるべくして現われたと言える。しかし、言語学史を書くことはこの方面にうとい筆者の任ではないし、この小論の目的でもないので、ここには、以下の論考に必要な最小限のことだけを述べることにする。

およそ言語学が学問として成功をおさめるためには、それが言語の理論として適切であるという保証が必要である。しかしある言語理論が適切か適切でないかという問題には、少なくとも三つの段階が区別される。⁽¹⁵⁾

1. 経験的データを正しく表わすという意味での適切さ。
2. ある国語を自由に使っている人が、直観的にもっている文法体系を正しくあらわすという意味での適切さ。
3. 1. と 2. を結合させた意味での適切さ。即ち、ある国語を自由に使っている人が、直観的にもっている文法だけが正しい文法であることを、経験的データに基づけて、説明するという意味での適切さ。

チョムスキーによれば、従来の言語学の理論は 1. か 2. に片寄りすぎ、

3. にはあまり注意が払われなかったという事である。⁽¹⁶⁾

一般に生成文法 generative grammar の名で呼ばれる言語理論が意図するのは正に 3. のような意味での適切さである。すなわちこの理論の目的は、ある国語を自由に話す人が、経験的なデータに基づき、直観的にもっている文法体系に従って、新しい文を生み出す generate 働きそのものを説明しようとするものである。もちろん私がある日本語の文を口に出すときに、こうした働きを「意識的に」考えてから言表するわけではない。しかし生成文法は、こうした native speaker の頭の中で起るであろうところのさまざまな過程を分析して、論理的に再構成しようとするのである。⁽¹⁷⁾

生成文法の中で、チョムスキーが「分類学的モデル」taxonomic model と呼ぶ理論は、「生成文法」というレッテルは張られていなかったとしても、変形文法が登場する以前から存在した。⁽¹⁸⁾ 分類学的生成文法の方法は極めて単純で、その主体は、phrase structure rule と呼ばれる一種の書き換えの規則 rewriting rule の集合である。⁽¹⁹⁾ この規則は例えば、英文法の場合には、次のようなものである。⁽²⁰⁾

R 1 $S \rightarrow NP + VP$

R 2 $NP \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{proper noun} \\ \text{indefinite pronoun} \\ \text{Det} + N \end{array} \right\}$

R 3 $Det \rightarrow (\text{pre-article}) + Art + (\text{Demon}) + (\text{number})$

R 4 $Art \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{Def} \\ \text{Nondef} \end{array} \right\}$

R 5 $Def \rightarrow \text{the}$

R 6 $Nondef \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} a \\ \text{some} \\ \phi \end{array} \right\}$

R 7 $N \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{common noun} \\ \text{personal pronoun} \end{array} \right\}$

$$R 8 \quad \text{common noun} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{count noun} \\ \text{noncount noun} \end{array} \right\}$$

$$R 9 \quad VP \rightarrow \text{Aux} + \left\{ \begin{array}{l} \text{be} + \left\{ \begin{array}{l} \text{substantive} \\ \text{Adv-p} \end{array} \right\} \\ \text{verbal} \end{array} \right\}$$

$$R 10 \quad \text{verbal} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{VI} \\ \text{VT} + \text{NP} \\ \text{Vb} + \text{substantive} \\ \text{Vs} + \text{Adj} \\ \text{Vh} + \text{NP} \end{array} \right\} + (\text{Adv-m})$$

$$R 11 \quad \text{Aux} \rightarrow \text{tense} + (\text{M}) + (\text{have} + \text{part}) + (\text{be} + \text{ing})$$

$$R 12 \quad \text{tense} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{present} \\ \text{past} \end{array} \right\}$$

$$R 13 \quad \text{personal pronoun} \rightarrow \text{I, you, he, she, we, it, they.}$$

$$R 14 \quad \text{VT} \rightarrow \text{see, find, help, write, ...}$$

$$R 15 \quad \text{count noun} \rightarrow \text{table, boy, dream, answer, ...}$$

$$R 16 \quad \text{Adv-m} \rightarrow \text{happily, carelessly, quickly, on purpose, ...}$$

以上の規則を使うと、「S」(文) のような抽象的な概念から, “She had written the answer quickly.” のような具体的な文の構造の記述 structural description が得られる。即ち,

$$(1) \quad S \rightarrow NP + VP \quad (R \quad 1^{(21)})$$

$$(2) \quad NP \rightarrow \text{Det} + N \quad (R \quad 2)$$

$$(3) \quad \text{Det} \rightarrow \text{Art} \quad (R \quad 3)$$

$$(4) \quad \text{Art} \rightarrow \text{Nondef} \quad (R \quad 4)$$

$$(5) \quad \text{Nondef} \rightarrow \phi \quad (R \quad 6)$$

$$(6) \quad N \rightarrow \text{personal pronoun} \quad (R \quad 7)$$

$$(7) \quad \text{personal pronoun} \rightarrow \text{she} \quad (R 13)$$

$$(8) \quad VP \rightarrow \text{Aux} + \text{verbal} \quad (R \quad 9)$$

VP, Det+N+Aux+verbal,.....) と区別して、最終連鎖 terminal string という。

注意すべきことは、phrase marker (21) で示される構造 structure が、あるアメリカ人が “She had written the answer quickly.” という時の、実際の心理的過程ではないという事である。前述したように、これはそうした心理的過程に対応する一つの論理的構成物であり、例えばこの文をしゃべる機械を設計しようとする時に、どんな過程を取るよう設計すればよいかを示す目標になるものと考えらるべきであろう。

次に最終連鎖を最下段としてもつ phrase marker を、「最終的に導き出された phrase marker」(final derived phrase marker 以下 f. d. ph. m. と略記する) という。ある文の f. d. ph. m. は ① その文がどのような語に分割されているか。② 分割された各語の順序。③ 語が集まってどのような句又は節を作っているか。④ 語その他の文の構成要素が、どんな文法的カテゴリーに属するかを明らかにする。⁽²²⁾ かくして f. d. ph. m. を求めることによって、理想的な native speaker がある一つの経験的な文を、自分の直観的な文法体系(規則)にもとづいて作り出す過程が記述できたことになり、生成文法の目的が達せられたわけである。⁽²³⁾

4

しかし分類学的生成文法には理論的に一つの難点がある。それは例えば英語の文を考えて見ても、その文の要素である名詞句に対し、名詞句を修飾する修飾節をつけ加えることによって、理論的には無限に多くの文を得られるからである。分類学的生成文法の方法では、一つの文に対して一つの f. d. ph. m. を実際に導出しなければならないので、理論的には無限に多くの f. d. ph. m. を必要とし、これらをすべて記述することは不可能である。

そこでこの欠点を正すために、少教の限られた f. d. ph. m. から、無限

に多くの文構造の記述を導き出すような規則が求められた。このような規則を変形規則 transformational rule と呼び、変形規則を含む文法体系を、生成文法の変形的モデル transformational model あるいは変形文法の名で呼んでいる。

具体的に述べるために例をあげると、

(23) Can you go?

(24) You can't go.

のような文は、意味の上から言うと、明らかに

(25) You can go.

という文とつながりがある。また、

(26) I have the teacher's pencil.

のような文は、意味の上から言って、

(27) I have the pencil.

(28) The teacher has the pencil.

のような二つの文とつながりがある。そこで、(25) (27) (28) のような文を、基本的な文として取り、(23) (24) (26) のような文は、基本的な文が変形したものと考えることができる。前者を中核文 kernal sentence, 後者を変形文 transform という。次に、ある中核文の phrase marker を、その中核文から生じた変形文の「基底にある phrase marker」(underlying phrase marker 以下 u. ph. m. と略記する。) と呼ぶ。いま文 (25) の最終連鎖 (文 (25) が中核文であるので, kernal terminal string あるいは K-terminal string と呼ぶ) が、

(29) $\phi + \text{you} + \text{present} + \text{can} + \text{go}$

であるとする、変形規則

RT1 $\text{NP} + \text{tense} + \text{M} + \text{X} \Rightarrow \text{tense} + \text{M} + \text{NP} + \text{X}$

を使って、

(30) $\text{present} + \text{can} + \phi + \text{you} + \text{go}$

のように変形できる。(30)を含む phrase marker は、明らかに文 (23) の f. d. ph. m. である。連鎖 (29) を含む phrase marker は文 (23) の u. ph. m. であるから、結局 RT1 は、文 (23) の u. ph. m. から f. d. ph. m. を導き出す規則であると言える。また連鎖 (30) のような f. d. ph. m. が示す文 (23) の構造は、現象としての文に近いという意味で、surface structure と呼ばれ、それに対して、連鎖 (29) のような u. ph. m. が示す文 (23) の構造は、より本質的な構造であるという意味で、deep structure と呼ばれる。

中核文 (25) から、(23) や (24) のような変形文を導出するためには、RT1 に類する変形規則が使われるが、これに対し、中核文 (27) と (28) とから変形文 (26) を導き出すような規則は、二重基底 double base をもった変形規則と呼ばれ、中核文 (27) のように、変形において主役を果す文の最終連鎖を matrix string、中核文 (28) のような脇役の文の最終連鎖を insert string と呼ぶ。二重基底変形 double base transformation とは、変形規則を使って、一つの matrix string に、他の（一つ以上の）insert string(s) を代入する手続きを指している。このような方法をとれば、丁度、数学の公理体系において、若干の公理と推論規則から、多数の定理が導出できるのと同じように、若干の中核文と、変形規則によって、無限に多くの変形文が生み出される。分類学的生成文法では不可能であった文構造の記述が、これで可能となるわけである。

5

かくして変形文法の記述は、一つの体系を成すのであるが、それが一つの体系として成り立つためには、完全性と無矛盾性を備えていなければならない。完全性はこの場合「すべての文法的に正しい文を含んでいる」ことであり、無矛盾性は「文法的に正しい文しか含まない」ことを意味する。⁽²⁴⁾

それではある文が「文法的に正しい」とはどういう事か。一見して「文法的に正しい」と言える文から、「文法的に正しくない」と言える文に至るまで、さまざまな「正しさ」の度合 *degrees of grammaticalness* が考えられる。⁽²⁵⁾しかし、今まで述べてきた方法によると、

(31) 私が本を読む。

(32) 本が私を読む。

は、どちらも「文法的に正しい」ことになってしまう。(31)が正しく、(32)が正しくないというためには、どうしても以上の理論(統語論 *syntax*)だけでは無理で、意味論 *semantics* に属する部分が、この理論に付け加わらなければならない。

既に述べたように、ある文の構造記述のうち、*surface structure* は、どちらかと言えば実際の文に近く、従って音声論 *phonology* の出発点となるべき構造であるが、これに対して *deep structure* は文のより本質的な構造であって、意味論の出発点となるべきものである。従って *deep structure* の諸相をさらに詳細に検討することによって、文の意味論的側面を明確にすることができ、「文法的に正しい文」を一層厳しく制限することもできる。

6

変形文法の意味論の部門には二つの要素が含まれる。第一は単語の表(*dictionary* または *lexicon* と呼ばれるが、実は後で述べるように、規則の集合から成るもので通常の辞書とは非常に違った性質をもっている。)であり、第二は、語の意味から、句や節のような文の構成要素の意味を規定する規則(*projection rule* と呼ばれる)である。ある文の *deep structure* に、*dictionary* と *projection rule* とを適用した結果を、その文の意味論的解釈 *semantic interpretation* と呼ぶ。

単語の表は、各語の意味の構造を示すもので、各語とその意味を示す事

項とを結びつける規則の集合である。例えば “bachelor” に対しては、
 $\text{bachelor} \rightarrow N, N_1, \dots, N_k; (i) (\text{Physical Object}), (\text{Living}), (\text{Human}),$
 $(\text{Male}), (\text{Adult}), (\text{Never Married});$
 $\langle \text{SR} \rangle.$

(ii) 以下略

のような表が考えられる。⁽²⁶⁾ この表について説明すると、 N, N_1, \dots, N_k はこの単語の統語論的構造を示す記号。(i) 以下の部分が、意味論的構造を示す記号である。例えば (Physical Object) は、“bachelor” という語が、抽象概念やある出来事を意味するのではなくて、物理的な事物を意味することを示し、(Living) は更に “bachelor” が無生物ではないことを示している。このような記号を semantic marker と呼ぶ。〈SR〉は、selection restriction の記号で、“bachelor” という語が他のどんな語（動詞、形容詞など）と結びつくか、又は結びつかないかを示すものである。（〈SR〉は具体的には semantic marker のブール関数として表示される。）semantic marker と selection restriction を合わせて、語の解釈 lexical reading と総称する。解釈が n 通りある語は、意味論的に n 通りのあいまいさ ambiguity をもつ語であると言える。

さて意味論的解釈は、文の deep structure, 従ってそれを表現する u. ph. m. に対して行なわなければならない。ある文 S に対して、 S の u. ph. m. の各構成要素に対し、単語表と projection rule を使って、解釈を与えるとき、 S の u. ph. m. は「意味論的に解釈された」u. ph. m. と言われる。 S の u. ph. m. の意味論的解釈とは、次の二つを合わせたものである。

(I) 意味論的に解釈された S の u. ph. m.

(II) 定義 (D1)~(D6) によって (I) から導き出される陳述の集合。

(D1) (C を S の u. ph. m. の任意の構成要素とするとき) C に与えられた解釈の集合が空集合であるとき、そしてそのときだけ、 C は意味論的に変則である。

(D2) 以下略。

次に S の意味論的解釈とは、次の二つを合わせたものである。

(I') S の u. ph. m. の意味論的解釈の集合。

(II') (I') から定義 (D' 1)~(D' 3) によって導き出される S についての陳述の集合。

(D' 1) 意味論的に解釈された S の u. ph. m. の一つ一つについて、各 u. ph. m. の構成要素が意味論的に変則であるとき、そしてそのときだけ S は意味論的に変則である。⁽²⁷⁾

要するに、S の構成要素をどう解釈しても、どんな解釈もなり立たない場合だけが、意味論的に変則であると言われるのである。例えば “Nothing nothings.” のような文について見れば、主語の位置にある “Nothing” (厳密に言えば Nothing という語に対応する u. ph. m. の部分) にどんな解釈を与えても、selection restriction が働いて、述語の位置にある “nothings” とは結びつかない。述語の位置にある “nothings” を先に考えても結果は同じである。従ってこのような文はどんな解釈もすることができず、意味論的に変則である。

また “good” のような言葉は、それ自身だけで独立した解釈を与えることができない。このような言葉は一つの関数 function として考えられるべきで、他の語句の意味と結びついてはじめて意味をもつ。このような概念を、それ自身独立した意味をもつ完全な意味での概念 (例えば “honest”, “bachelor”, “liquid” などの語で示される概念) と区別して、「他の概念と共在する概念」syncategorematic concept と言う。即ち “good” という言葉は、文中の他の語の意味と結びついた時にだけ意味があると言うわけである。⁽²⁸⁾

7

直観的に無意味な文を変則的な文として排除するためには、その文の u.

ph. m. 分析と、その文に使われている語の selection restriction を明らかにすることだけで十分である。またこの restriction のつけ方は、経験的なデータに依存している。従って論理実証主義が落入了ような、理論の「放縦さ」には落入らないですむ。また u. ph. m. の統語論的および意味論的分析は、一つの規則の体系として組織化されて居り、オクスフォード学派のような、「反理論」への方向にも進まないでよい。ただしこの理論が、かつて論理実証主義によって、はなばなしく提唱された意味の規準(厳密には有意味性の規準)の問題にピリオドを打つものかどうかは問題である。論理実証主義が意図したものは、ある学の理論を厳密な体系の上に基礎づけることと同時にカントの意味での先天的綜合判断はあり得ないということを明確にすることであった。即ち、われわれの認識は、

1. 綜合的認識であるならば必ず経験的データに基礎づけられている。
2. 経験と無関係な認識ならば、必ず分析的である。

ということの主張であった。事実に関して何がしかの知識を与えるような認識は、経験科学における如く、経験から帰納された命題によって検証されなければならない。またもしそうでなければ、例えば、論理学や数学の認識がそうである如く、我々の知識に対して、何事かをつけ加えるものではない。このような考え方の上に立って、論理実証主義は、「哲学の問題」と普通言われている問題——例えば「唯心論か唯物論か」「一元論か多元論か」「観念論か実在論か」などの対立が無意味であることを主張したのである。これは伝統的な哲学（あるいは論理実証主義以外の哲学）の理論に対する一つのアンチ・テーゼであって、論理実証主義の方法にいろいろの欠陥があることが指摘されたとしても、尚現代哲学の一つの方向としてその根本的な立場は評価されなければならない。

変形文法の理論的方法は、論理実証主義の方法を批判すると共に、その欠点を除去する一つの方法論を確立している。変形文法の方法によっても、形而上学の諸命題を「意味論的に変則」として排除することは

可能である。ただしここで注意すべきことは、変形文法の意味論によっては、かつて論理実証主義が行なおうとした、哲学の問題へのアプローチがもはや不可能になっているということである。変形文法の理論は、言語現象の解明には有力な手段ではあるけれども、その結果は哲学の方法として役立つものではないと思われる。例えば“good”の意味をいくら分析しても道德哲学の実質的な問題解決には役立たないということである。これは否定的な結論ではあるけれども、二十世紀の哲学のある部分が、方法として言語分析を用いすぎたという点を考慮すれば、一つの重要な意味をもつ結論に違いない。以下この問題について、考えて見たい。

8

論理実証主義において「無意味」という評価はどのようなことであるかというと、それは「真でも偽でもない」ということである。ところで真理には三つの種類がある。

1. 事実と一致する命題は真である。
2. 他の知識と矛盾しない命題は真である。
3. ある有効な操作を導入する命題は真である。

1. の命題は感覚的知覚を表現した命題、3. はある理論体系の大前提となる仮説や公理、2. は、1. と 2. の中間にあるもの、即ち、両者を結びつける命題である。⁽²⁹⁾そこで「真でも偽でもない」ということは、1.~3. のそれぞれの命題がそれぞれの条件を満足させるかどうか決定する方法がないということである。ある文が 1.~3. のうちのどの種類の命題の表現であるか、またその真偽を決定する方法があるかどうかは、その文の論理的構造に依存している。

ところが、文の論理的構造は、文の文法的構造とは別のものである。例えば、

(33) a は b より大きい。

という文の論理的構造について考えて見よう。この文の論理的意味は、今何か二つのものがある、一方を a 、他方を b とするならば、 a と b との間に常に $a > b$ なる関係が成り立つということであるから、

(34) $(x)(y)(x=a, y=b \rightarrow Fxy)$

(34) は (33) の論理的構造を表わしている。又いま、

(35) 私は A さんに本を貸した。

のような文の論理的構造について考えて見ると、

(36) $(x)(y)(z)(x=a, y=b, z=c \rightarrow Gxyz)$

(36) は (35) の論理的構造の表現である。

(34) や (36) には四つのカテゴリー（論理学的カテゴリー）が用いられている。即ち、

1. 常 項 ($a b c \dots$)
2. 個体変項 ($x y z \dots$)
3. 関数変項 ($F G \dots$)
4. syncategorematic な記号 ($() = \cdot \rightarrow$)

文の要素をこのようなカテゴリーに分ける事は、記号論理学の理論では、統語論（論理学的統語論）の部門に属する。論理学的カテゴリーは、文法的統語論のカテゴリー（名詞、動詞、形容詞……）とは別のものである。⁽³⁰⁾

従って (34) が、「 a 」と「 b 」との間の関係、(36) が「私」と「 A さん」と「本」三者の間の関係を示して居り、個体変項で示されるもの（ a, b , 私, A さん, 本）と関数変項で示されるもの（より大きい, 貸した）との二部分に大別できる。これに対して文 (34), (35) を文法的カテゴリーによって別けるという事になれば、(33), (35) はそれぞれ, NP (a , 私) と, VP (b より大きい, A さんに本を貸した) の二部分に大別されるが、これは（論理学的カテゴリーとは違う）文法的カテゴリーによって文を分析したからである。

(33), (35) をそれぞれ NP+VP に分け、その各部分を更に下位の文法

的カテゴリーによって分けて行けば、最後に f. d. ph. m. に達する。この場合 f. d. ph. m. は、又同時に、(33), (35) の u. ph. m. でもある。経験的データに基づいて (33), (35) の中の各語に対する dictionary を作り、projection rule を適用すれば、(33), (35) の文法的意味は確定する。しかしこの意味は、(34), (36) の式が示すような論理的構造がもつ意味とは次元の異なるものである。なぜなら、もし両者が同一次元において考えられているとすれば、文 (33), (35) は、全然異なった二つの意味構造をもつことになるからである。即ち、一方は「(a は b) + (より大きい)」あるいは「(私が A さんに本を) + (貸した)」という構造であり、他方は「(a は) + (b より大きい)」あるいは「(私が) + (A さんに本を貸した)」という構造である。

9

このように文の論理的構造と文法的構造とが異なる次元にあるとすれば、文法的構造に基づいた意味の分析と、論理的構造に基づいた意味の分析は区別されなければならない。いうまでもなく、論理は思惟の形式であり、文法は言語の形式であって、思惟と言語とはどこかで結びついているかもしれないという漠然とした予想は立てることができる。しかし、変形文法の方法によって得られる文の deep structure が論理と直接に結びついているという証明は恐らく今のところ得られていない。人間の思惟活動と言語活動は類似しているという証拠はあるかもしれないが、両者の類似から、直接両者の一致を推論する事はできない。両者が一致するかしないかは将来人間の知的活動のメカニズムがもっとはっきりするまで、真偽を断定する事ができない一つの仮説である。それまでは、変形文法の意味分析が方法論的にすぐれている事を認めるとしても、論理実証主義が行なった論理学的な意味分析の意義を否定することができないのである。

(次稿に続く)

【注】

- (1) このような規準を挙げて批判的に解説した文献として、C. G. Hempel, "Problems and changes in the Empiricist Criterion of Meaning," *Revue internationale de Philosophie*, vol. 11, 1950; reprinted in L. Linsky, (ed.), *Semantics and the Philosophy of Language*, University of Illinois Press, 1952. がある。
- (2) R. Carnap, "The Elimination of Metaphysics through the Logical Analysis of Language," in A. J. Ayer (ed.), *Logical Positivism*, Macmillan Co., 1959. 参照。
- (3) R. Carnap, *The Logical Syntax of Language*, Routledge & Kegan Paul, London, 1937. の中にこのような人工言語が具体的に構成されて示されている。
- (4) cf. J. J. Katz, "The Philosophy of Language," Harper & Row, 1966. p. 18 ff.
- (5) カルナップの意味論については、R. Carnap, *Introduction to Semantics*, Harvard University Press, 1946. R. Carnap, "Meaning Postulates," in R. Carnap, *Meaning and Necessity*, University of Chicago Press (2nd edition), 1956. を、また語用論については、R. Carnap, "Meaning and Synonymy in Natural Languages," in R. Carnap, *Meaning and Necessity* (2nd edition). 参照。
カルナップの意味論に対する批判については、W. V. Quine, "Two Dogmas of Empiricism," *Philosophical Review*, vol. 60, 1951; reprinted in *From a Logical Point of View*, Harvard University Press, 1953. 参照。
- (6) ビトゲンスタインはケンブリッジ大学で教えていたので、いわゆるオクスフォード学派の人々との間に、考え方の相違がある。ビトゲンスタイン自身の言語論は、L. Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul, London, 1922. L. Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, Basil Blackwell, Oxford, 1953. に見られる。オクスフォード学派の考え方は、G. Ryle, *The Concept of Mind*, Hutchinson & Co., London, 1949, P. F. Strawson, *Introduction to Logical Theory*, John Wiley & Sons, 1952. A. G. N. Flew (ed.), *Logic and Language*, vol. 2, Basil Blackwell, Oxford, 1955. A. G. N. Flew (ed.), *Essays in Conceptual Analysis*, Macmillan & Co. London, 1956. 所収の諸論文に見られる。

- (7) J. O. Urmson, "On Grading," in A. G. N. Flew (ed.), op. cit. (1955).
- (8) cf. Katz, op. cit. (1966), p. 68 ff.
- (9) W. V. Quine, *Word and Object*, M. I. T. Press, 1960. 言語学の方から、この方向に進んだ研究では、B. F. Skinner, *Verbal Behavior*, Appleton-Century-Crofts, 1957. がある。Skinner に対する変形文法の立場からの批判については、N. Chomsky, "A Review of B. F. Skinner's *Verbal Behavior*," *Language*, 35, No. 1 (1959); reprinted in Fodor and Katz (eds.), *The Structure of Language: Readings in the Philosophy of Language*, Prentice-Hall, Inc., 1964. 参照。
- (10) コミュニケーションの理論については、C. E. Shannon and W. Weaver, *The Mathematical Theory of Communication*, University of Illinois Press, 1949. 参照。
- (11) Fodor and Katz (eds.), op. cit. (1964). p. 417. の意味論についての編集者の意見参照。
- (12) Katz, op. cit. (1966). 第四章と、第五章の中の Linguistic Analysis の項参照。なおこの本の第五章には生得観念や範疇などの哲学的問題に対する意欲的な問題解決の提案が含まれている。
- (13) 変形文法の考え方は、初期と現在とでは幾分違って来ている。初期の考え方をまとめたものは N. Chomsky, *Syntactic Structures*, Mouton & Co., 1957. 最近の考え方は、Katz, op. cit. (1966), Fodor and Katz (eds.), op. cit. (1964). 所収の諸論文、N. Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, M. I. T. Press, 1965. などに見られる。
- (14) スコラ哲学の用語を使っているが、意味内容は変形文法の理論によって厳密に定義されるものである。
- (15) cf. N. Chomsky, "Current Issues in Linguistic Theory," in Fodor and Katz (eds.), op. cit. (1964). p. 62 ff.
- (16) チョムスキーが、1. にかたよりすぎていると批判しているのは、Bloch らの「後期ブルームフィールド学派」と呼ばれる言語学者、Firth を中心とする「ロンドン学派」などである。これに対して、Sapir, Jespersen らは 2. にかたよりすぎているという。
- (17) P. ロバーツ著、黒田巍訳「変形文法入門」昭和四十一年開文社刊所収のチョムスキーの序論参照。
- (18) 生成文法と変形文法を同一視する人もあるが、チョムスキー自身は、「生成文法」を広義に用いて居り、変形文法は生成文法の一つのモデルとして考えてい

る。即ち, phrase structure grammar を生成文法の taxonomic model の名で呼び, これに対して transformational grammar を生成文法の transformational model と呼んでいる。両モデルの大きな違いは, 言うまでもなく, 変形規則を含むと含まないとの違いである。Fodor & Katz (eds.), op. cit. (1964). pp. 52-53 参照。

- (19) 書き換えの規則は, その性質上回帰的な規則である。回帰的な性質をもつ規則は一般的には回帰関数論において明らかにされている。この理論については, S. C. Kleene, Introduction to Metamathematics, D. V. Nostrand Co., 1952. あるいは, 哲学第33輯所収, 大出 晃「初等及び一般回帰函数の理論とその適用——論理構造論研究 I ——」参照。

- (20) ここで用いられる記号の意味は次の通りである。

S	: 文	Adv-p	: 場所の副詞
NP	: 名 詞 句	VI	: 自 動 詞
VP	: 動 詞 句	VT	: 他 動 詞
Det	: 限 定 辞	Vb	: become で代表される動詞
N	: 名詞相当語	Vs	: seem で代表される動詞
Art	: 冠 詞	Vh	: have で代表される動詞
Def	: 定 冠 詞	Adv-m	: 様態の副詞
Nondef	: 不定冠詞	Adj	: 形 容 詞
ϕ	: 空 集 合	M	: 相の助動詞
Aux	: 助 動 詞		

記号の説明には, 伝統的な文法用語も用いたが, 変形文法の場合には, 伝統的な用語の意味よりも, かなり広義に用いている場合 (例えば「助動詞」) もある。なお, 変形文法の用語の記については, ロバーツ, 黒田訳前掲書によるところが大きい。

- (21) 各行の左端の数字は, 書き換えの行なわれる順序を, また右端の数字は書き換えに使われる規則の番号を示す。
- (22) cf. Katz, op. cit. (1966). pp. 124-125.
- (23) f. d. ph. m. を導出する手続きが一義的であること, 即ち同一の導出は同一の f. d. ph. m. を作り, 異なる導出は異なる f. d. ph. m. を作ることが要求される。言いかえれば, 異なる導出によって同一の f. d. ph. m. を得ることは絶対にないという保証が必要である。このために structure assignment algorithm と呼ばれる手続きが考えられた。これは文 S_i の phrase marker の集合と, 統語論的規則 R_j を結びつける一種の関数 $F(i, j)$ である。

- (24) 完全性と無矛盾性の概念については, A. Church, *Introduction to mathematical Logic*, vol. 1, Princeton University Press, 1956. の定義による. なお沢田允茂「現代論理学入門」岩波新書 175～178 頁「公理体系の諸性質」にコンパクトな記述がある.
- (25) *degrees of grammaticalness* については, Fodor and Katz (eds.), *op. cit.*, 所収の Chomsky の同名の論文及び, N. Chomsky, *op. cit.* (1965). 第 4 章 1 節参照.
- (26) Katz, *op. cit.* (1966). p. 155. より引用. 同じ例について Fodor & Katz, *op. cit.* (1964). p. 495 f. にもっと詳細な説明を加えてある.
- (27) cf. Katz, *op. cit.* (1966). pp. 171～172.
- (28) “good” の意味の分析は, Katz, *op. cit.* p. 288 以下に詳細な記述があり, *semantic marker* の下位カテゴリーとしての, *evaluation semantic marker* を用いている.
- (29) 沢田允茂「哲学の基礎」昭和四十一年有信堂刊 122～123 頁参照.
- (30) Church, *op. cit.* § 01～06 参照.